県　立　図　書　館

第1節　概　　要

1　はじめに

昨年度は館内サービス態勢の強化ということで大幅な模様替を実施したが、その効果がどうあらわれたかということは、第1に成人の利用者がはじめて3万人台に達したことと、それにともなって、第2に館外貸出冊数が大きくのびて16,000冊台になったということから（表2～4参照）、長年の努力目標である「いかにして一般成人の利用を増大させるか」ということが徐々にではあるが、結果としてあらわれてきたことは喜ばしいことである。しかし図書館はまだまだ一般の人にとっては敷居の高い施設である。図書館を利用しようとして図書館の前まで来ても玄関であきらめてしまうようなことがありはしないか。われわれは絶えずこういう反省の上にたって、「受験期には図書館は超満員…」といった図書館運営から脱却する努力を講じていかなければならない。

次に人事面で、特に館の運営を左右する館長職において、戦後新しい図書館の揺籃時代から営々努力し、今日の近代図書館としての姿を作りあげた桑原善作が4月1日付をもって退任し、後任には社会教育課長丹野清栄が兼任館長として就任、多忙な身にもかかわらず、特に対外活動の分野において、社会教育関係者との密接な連けい組織づくりに尽力し、地方社会教育関係者の図書館への理解、読書活動の必要性の認識という、今まで図書館自体では容易になし得なかったルートの開拓という大きな業績を残した。

明けて42年2月1日付で県立内郷高等学校教頭鈴木一が館長に就任し、図書館も一時代を画することになるであろう。

ついでにふれるなら郡山市図書館長山崎義人氏41年10月退任、白河市図書館長本間昇氏42年4月退任という県内図書館界の状況である。

次に資料収集の面においては、資料館としての立場から、本県に関する古文書等の収集のために緊急整備費という形で予算確保できたことは特筆されるべきことで、今後こうした面の収集にあたっては、県内に存在するものは、なるべく寄贈或いは寄託の形で収集し、後世の県民への遺産として保存したい。今年度は本県の生んだ明治の算学者佐久間纘（庸軒：文政2年～明治29年、田村郡船引町）の家族より氏の著わした算学書約 200点の寄贈をうけた。（佐久間纘については館報あづま '64の8月号参照）。

このように隠れた郷土の貴重な資料については、図書館職員の力だけでは発見も困難であり、各方面の方々が絶えず、そういう注意の眼を向けていただき、保存に協力をしていただきたいと希望する。

2　図書館協議会

(1) 委員氏名

昭和40～41年度

大竹　謙蔵	県議会厚生文教委員長
石井　政男	石城郡四倉町公民館長
片平　太吉	福島市立大鳥中学校教頭
三本杉　国雄	福島市教育委員会教育長
白岩　和夫	県立福島女子高等学校教頭
高木　ツネ子	県婦人団体連合会常任理事
立谷　麗子	郡山市教育委員
寺内　久平	ＮＨＫ福島放送局長
平井　博	福島大学教育学部長
宮森　啓治	県小中学校ＰＴＡ連絡協議会副会長

昭和42年～43年度

猪俣　シズエ	県婦人団体連合会副会長
三瓶　正弘	県議会厚生文教委員長
国分　伝三	県小中学校ＰＴＡ連絡協議会副会長
三本杉　国雄	県立福島高等学校長
白岩　和夫	県立小野高等学校長
塩川　朝夫	福島民報社常務取締役編集局長
新村　邦吉	福島市立西信中学校教諭
平井　博	福島大学教育学部長
松井　司観	県公民館連絡協議会副会長
渡辺　久	県社会教育委員

(2) 協議会の開催

第　1　回

日　　時　　11月9日

場　　所　　県立図書館

出席委員　　8名

協議事項

- 昭和41年度図書館運営の概要について
- 昭和41年度当初予算について
- 望ましい図書購入費と当館の図書購入状況について
- 対外活動の現状分析と今後の課題について

第　2　回　（新委員による）

日　　時　　3月24日

場　　所　　県立図書館

出席委員　　8名

議　　長　　平井　　副議長　　三本杉　ときまる

報告及び協議事項

- 昭和41年度の事業報告について
- 昭和42年度予算について
- 昭和42年度事業計画について
  - (1) 館内奉仕計画について
  - (2) 館外奉仕計画について
  - (3) 普及文化事業について
  - (4) 館報「あづま」の発行について
  - (5) 資料の収集方針について
  - (6) 蔵書目録の刊行について

協議内容

(1) 館内奉仕については、貸出しを図書館運営の中心にすえ、なるべく多くの利用者に貸出すサービスを前面に出し、その伸長を図るためには、現在の二階閲覧室を公開書架が並んだ公開書架室にし、閲覧室